

# 土地利用変化にみる日南市のまちづくり

岩 動 志乃夫

## Changing Land Usage Patterns in Nichinan City Urban Development

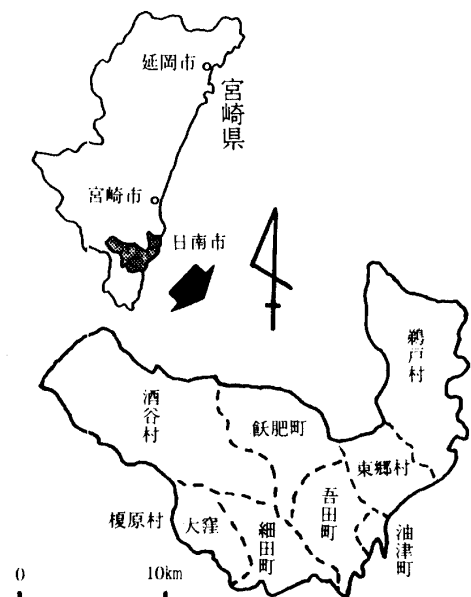
Shinobu ISURUGI

### 1. はじめに

地図を利用して土地利用変化を観察する方法は、地理学において頻繁に用いられる。これに類する代表的研究例として山口恵一郎・佐藤悦・沢田清・清水靖大・中島義一編（1976）、竈瀬良明・堀淳一・山口恵一郎（1981）らによる新旧の地形図の比較による土地利用変化を分析した研究がある。都市の市街地拡大・発展の過程は、いくつかに分類される。再開発により新たな都市機能を旧市街地にさらに集積させながら発展していく例が多くみられる一方で、旧市街地を保存し、市内の他地域で新たな機能を集積させながらバランスよく発展している都市もいくつか存在する。小規模都市で後者のように新旧の都市機能を明確に分担させながら発展している例として日南市を指摘することができる。藩政時代より飫肥を城下町、油津を漁港として発展し、明治期以降県南部の拠点都市へと成長した同市は、飫肥と油津の中間地点である吾田の業務化、工業化、宅地化により市街地を拡大して今日へと至っている。小都市が都市機能を地域的に3分担して機能させていることはきわめて特徴的である。そこで土地利用の変化から機能分化していく過程を分析し、これら3地区（飫肥、油津、吾田）の現在の機能を把握することを目的とする。方法は、1902（明治35）年と1986（昭和61）年測定の地形図を利用して日南市の中心地を形成する3地区の土地利用変化を概観していくものとする。

### 2. 市勢概要

日南市は、宮崎県南部の中核都市（人口47,596人・1995年）である（第1図）。沖合いを流れる黒潮の影響により同市は（年平均気温18.1度、初霜12月30日、終霜



第1図 日南市の旧町村（1949年）

2月22日), 宮崎市(17.6度, 11月12日, 3月8日)よりも一段と温暖である。日南市は, 江戸時代より伊東氏5万1000石の城下町として内陸の飫肥が繁栄し, 明治期には郡役所が置かれた。港町の油津は, 漁港に加えて飫肥杉の積み出し機能を有する藩の外港として栄えた。

明治期の主な集落は, 飫肥, 油津, 大堂津であり, 飫肥には郡役所, 町役場, 油津と吾田の戸高には町村の役場が置かれていた。人口(1911年)は, 飫肥町8,148人, 油津町4,850人, 吾田村(大堂津を含む)5,911人であり, 当時最も規模の大きい飫肥を中心に主要路線が形成されていた。飫肥から北方へ通じ, 宮崎と結ぶ「飫肥街道」, 飫肥と油津を結ぶ路線, 一里松から分岐して大堂津方面に通じる路線がみられる(第2図)。

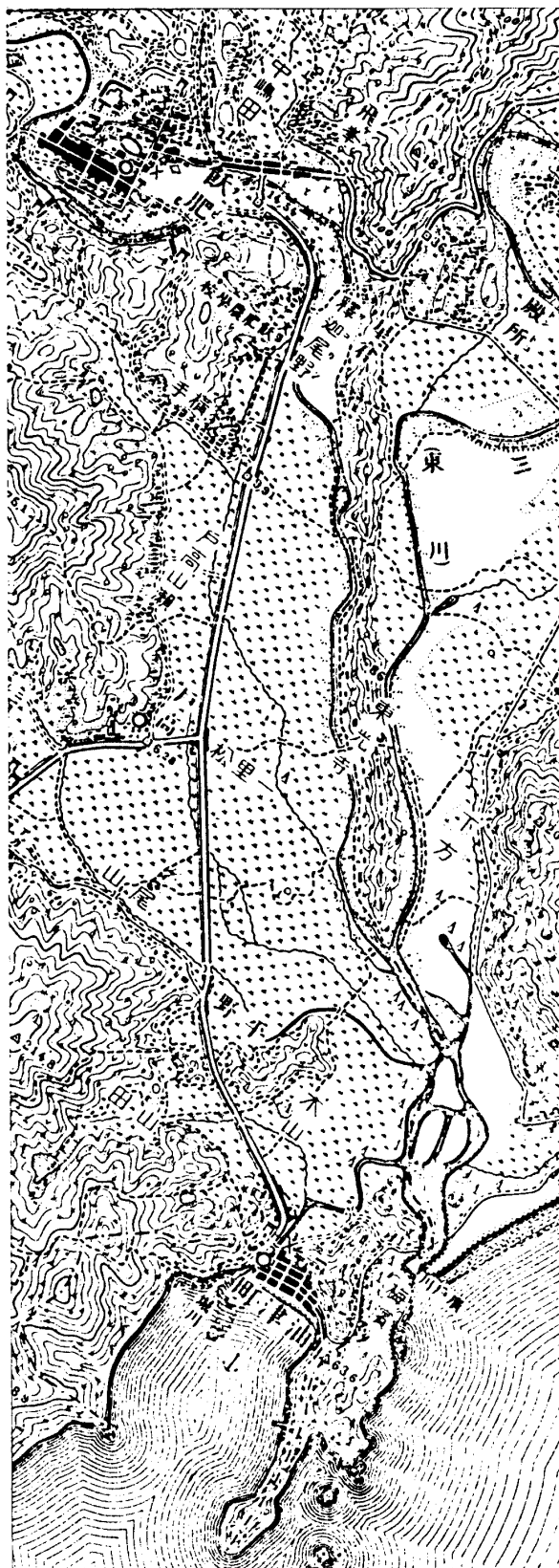
飫肥-油津間の県道は, 1989(明治22)年に完成し, 2年後には乗合馬車が運行された(現・国道222号線・日南-都城)。海岸沿いの国道220号線(宮崎市-日南市-国分市)は, 同市北方の「鶴戸トンネル」完成(1958年)後, 宮崎市との往来を飛躍的に向上させた。両路線は, 1965年に国道へ昇格している。現在の「飫肥街道」は, 広渡川を横断後, 北上する形態をなしており, 途中分岐して宮崎自動車道・田野インターチェンジに直結する路線として整備されている。当地への鉄道は, 1913(大正2)年の県営軽便鉄道(飫肥-油津)敷設が最初であり, 明治期の地形図にまだ鉄道は見られない。同鉄道は, 県内では吉都線(小林-吉松・1912年)に次ぐ敷設であった。その後, 幾多の変遷をへて宮崎市まで全通したのは1963年であった。

飫肥と油津が, 古い歴史的核を有するのに対して, その中間に位置する吾田には飫肥町, 油津町, 吾田町, 東郷村(1950年)の3町1村が合併し, 日南市が誕生した際に市役所が設置された。その後, 細田町, 鶴戸村(1955年), 酒谷村の合併および榎原村の一部を編入(1956年)し, 市域を拡大させたが市役所の設置された吾田は, 行政地区として発展し, 新しい都市核が形成された地域である。このように日南市は, 3つの核を有する都市であるが近年コナベーション化しつつ, 飫肥-吾田-油津を結ぶベルト状の中心市街地が形成されつつある(第2図)。

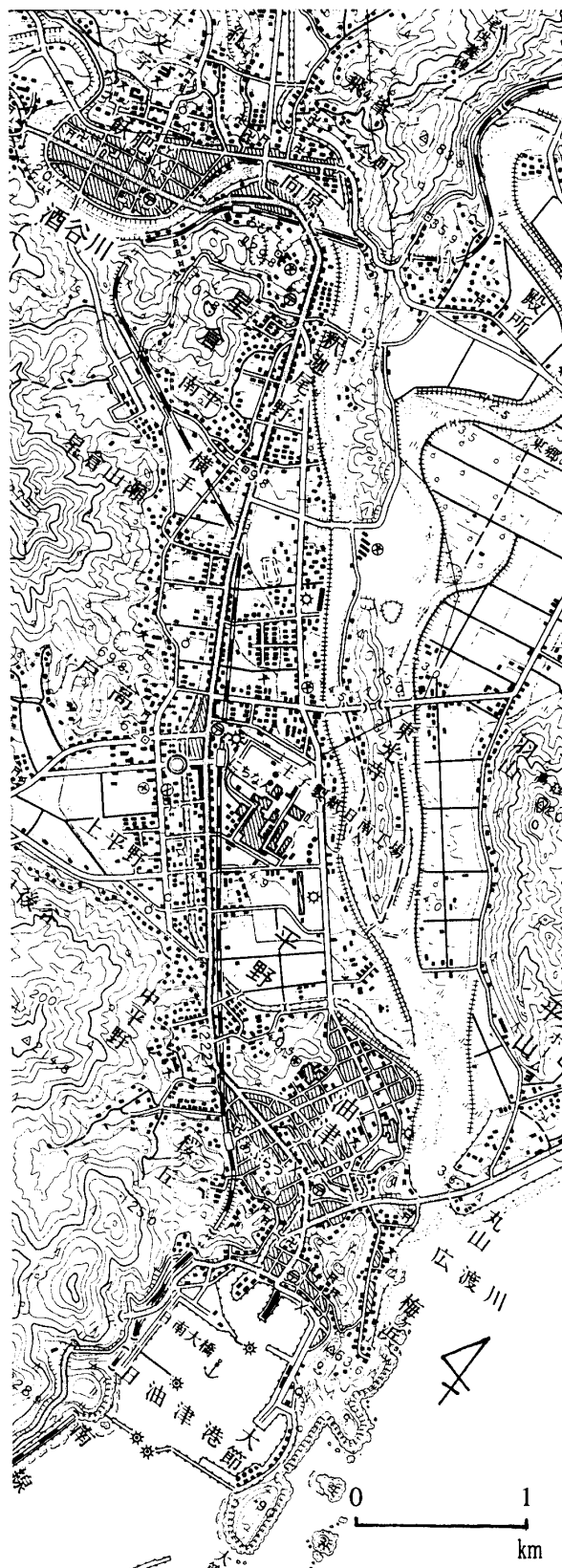
### 3. 城下町の景観を残す町 - 飫肥 -

初代藩主・伊東祐兵<sup>すけたけ</sup>によって1600(慶長5)年飫肥に城下町の基礎が築かれた。飫肥城下を囲むように酒谷川が東流し, 同河川は当時天然の堀としての機能を有していた。城は平山城であり「松尾の丸」は, 標高約50mの丘に築かれ, 現在の建築物はすべて飫肥杉を使用して復元(1979年)されている。現在これに隣接して飫肥小学校, 飫肥中学校が立地している。町割りには, 城に最も近い横馬場通りを中心とする十文字地区に上級家臣の屋敷が配置され, 城から南へ離れるにつれて中級家臣の屋敷(鳥居下地区)が配置された。本町は, 藩政時代より商人町であり, 最も南に位置する前鶴地区には下級家臣の屋敷や御用職人の屋敷が配置された。飫肥城入口から南北に大手門通りが通じ, これに沿って城下は南方向に傾斜し, 酒谷川付近では標高約20m程度になる。

第2次世界大戦後, 日南市の発展は, 吾田を中心に進展したため, 近世初期の町割形態をなす飫肥は, 当時の面影を損なうことなく現在に至った。1976年飫肥城下の一部が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された(第3図)。これは1960年代以降の高度経済成長期におけるわが国の急激な国土開発・都市化の影響による文化財の危機回避策として文化庁より推進された制度である<sup>1)</sup>。重要伝統的建造物群保存地区の保存整備事業には国庫補助金が交付される。補助事業者は, 保存地



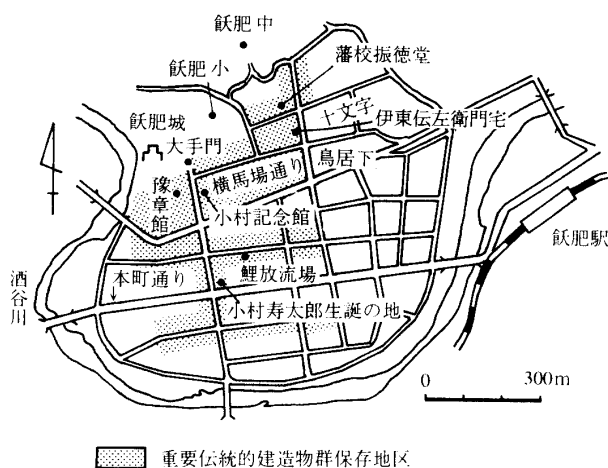
1902 (明治35) 年



1986 (昭和61) 年

第2図 日南市中心部

資料：国土地理院発行 5 万分の 1 地形図



第3図 飫肥の町並保存指定地区

資料：『歴史の町並み再発見』（1993）より作成

区の所在する市町村となっている。管理事業としては、標識、説明板、案内板、境界標識の設置や防災施設の設置事業が実施されている。この他住民用駐車場、代替道路の整備、電柱・電線およびアンテナの撤去等が大きな課題となっているが電柱および電線は、町並みの裏側に移設したり、地下埋設を実施する例が多い。飫肥の保存地区指定の中心は、苔むした石垣が重厚な景観をみせる大手門通り、上級家臣の武家屋敷が隣立する横馬場通りを中心とした十文字地区であるが、電柱等は地下に埋設し、当時の景観を復元している（写真1）。

保存修理事業としては伝統的建造物の修理事業、建造物以外の修景事業、生垣、石垣、石畳等の復旧・修景事業があげられる。伝統的建造物の修理の際に補助の対象は、主として外観に限られるが場合によっては必要に応じて柱、梁等の構造耐力上主要な内部の部分的修理も対象とすることが可能である。修景事業は、伝統的建造物群と調和するように整備していく事業である。特に地区の特性をふさわしくするものについては補助の対象になる。しかし最近の飫肥の横馬場通りの例のように住民との意見調整が必ずしもうまく展開しないのが実状のようである。

藩政時代より街路の両側には当時生活用水として利用された水路が流れ、現在では「鯉の放流場」として整備され、観光のポイントになっている（写真2）。上級家臣の屋敷の南側に隣接して中級家臣の武家屋敷、さらに商人町である本町へと至る。本町は保存指定地域



写真1 重要伝統的建造物群保存地区に指定された横馬場通り

資料：1995年 筆者撮影



写真2 鯉の放流場

資料：1994年 筆者撮影

ではないものの、建築物は白壁に黒瓦屋根で統一され、城下町独特の落ち着いた景観を呈しており、商店主の景観保存に対する積極的な姿勢がうかがえる（写真3）。この地区の住民たちで結成する「本町研究会」<sup>2)</sup> が中心になって城下町の町並みにふさわしい通りに整備することを目的として白壁に黒瓦屋根、格子戸造りの家屋の建設を奨励している。近年電柱・電線の埋設化が推進され、一段と重厚感を増して城下町の雰囲気は漂う町並みが出現してきた感がある。さらに同通りの南側に隣接する前鶴地区には下級家臣の武家屋敷が配置されていた。町並み保存地区指定を契機に1979年より毎年10月には「飫肥城下祭り」が豪華絢爛に開催され、史跡観光をいっそう華やかなものになっている。その結果、宮崎県に來訪する県外観光客のうち、飫肥を「観光先」にしている観光客は、103,680人（1982年）から274,860人（1993年）へと11年間に2.65倍もの驚異的な増加を示している<sup>3)</sup>。自然景観、伝統的町並み、祭り、そして飫肥杉に代表される伝統産業等をまちづくりにうまく調和させながら飫肥は、「九州の小京都」<sup>4)</sup> としての面影を一段と色濃く描き出しているのである。



写真3 本町通りの町並み

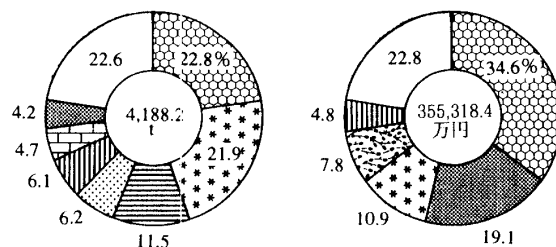
資料：1995年 筆者撮影

#### 4. 港と運河のある町ー油津

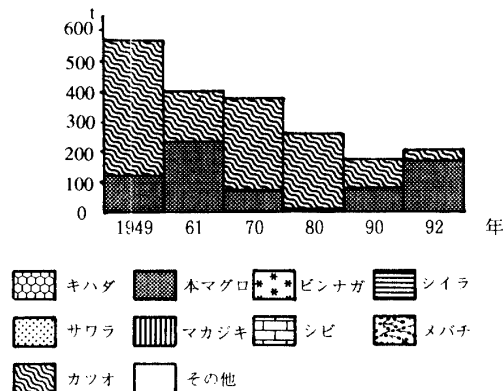
油津港は、大節鼻によって東側が外洋と隔てられ、古くから天然の良港であった。1902（明治35）年には「油津漁業組合」が誕生し、その後重要港の指定（1952年）を受けている。同港の漁業は、カツオとマグロがその中心をなしてきた。特に大正末期から戦前まではマグロ漁で大変な賑わいを呈した。現在の漁獲量は4,188.2トン（1992年）、漁獲金額は35億5318.4万円（同年）である（第4図）。漁獲量は、「キハダ」、「ビンナガ」が上位であるが、漁獲金額では「本マグロ」が「キハダ」に次いでおり、「本マグロ」は、現在でも同港の重要な地位を占める魚種である。

戦後の本マグロ漁獲量の変遷であるが126トン（1949年）から途中増減はあるものの現在では176トン（1992年）を沿岸延縄により水揚げしている（第4図）。カツオに代わって本マグロの漁獲量が増加しており（対県比：84.6%・

① 漁獲量と漁獲金額内訳（1992年）



② 戦後の本マグロとカツオの漁獲量



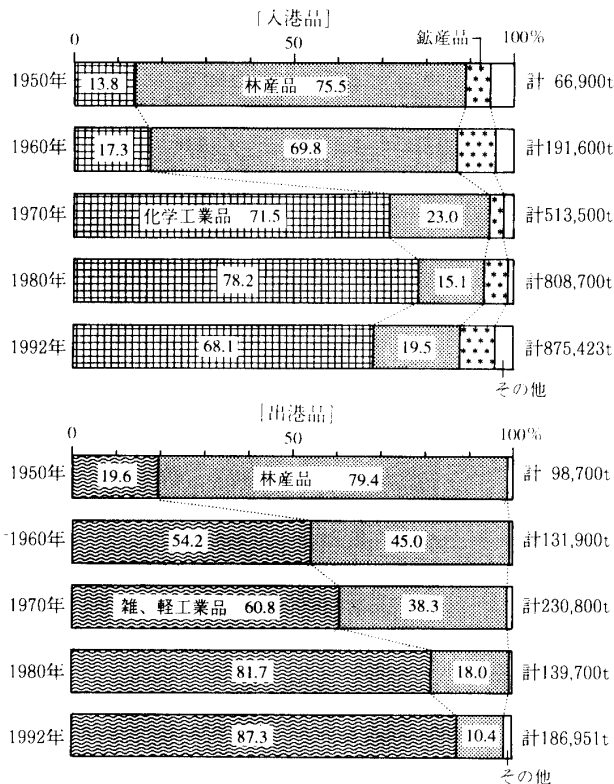
第4図 油津港の漁獲量

資料：「宮崎県水産統計」より作成

1992年), 県を代表するマグロ基地としての機能を有しながら成長している。1995年には「全国豊かな海づくり大会」が同港を会場に開催されるなど漁業に関する同港の果たす役割はますます重要になってきている。

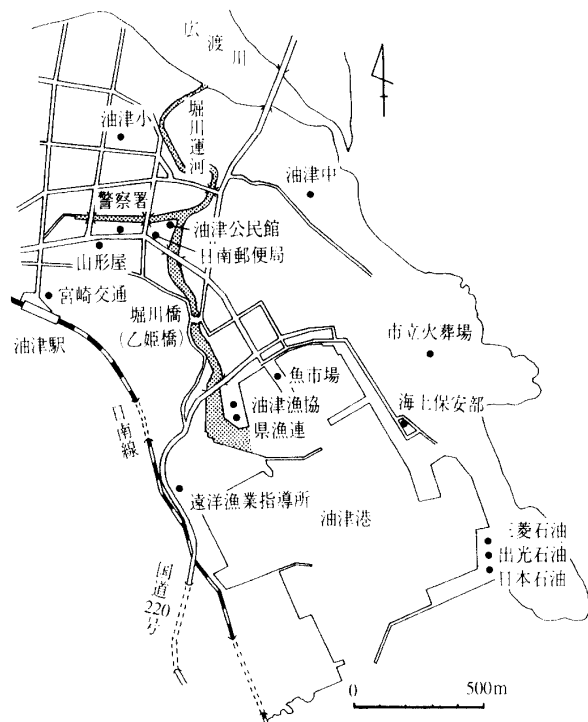
港湾の流通(1992年)は, 入港貨物が875,423トン(対県比12.0%), 出港貨物が186,951トン(同比8.3%)であり, 入港過多という特性を有している。入港貨物の推移であるが1950年の最多品目は「林産品」が50,500トン(同港比75.5%)であり, 後述するパルプ工場で加工する原木が多数を占めていた(第5図)。現在もこの原木を中心に「林産品」を170,712トン移入している。しかし1970年頃から最多品目は, 「化学工業品」へと変化し, 現在は「化学工業品」596,429トン(1992年, 同港比68.1%)のうち石油・重油関係が89.4%を占めている。1976(昭和51)年の同港整備拡充計画による埠頭整備の実施, 三菱, 出光, 日本石油等の重油・石油貯蔵施設の完成によって県南部や鹿児島県東部にまで後背圏域を拡大したことによる増加である。

出港貨物は, 1950年に「林産品」が78,401トン(同港比79.4%)で最多であり, その98.4%を原木(飢肥杉)が占めていた。しかし時代の推移とともに徐々に減少し, 代わって「雑・軽工業品」が最多になっている(第5図)。現在は163,173トン(1992年, 同港比87.3%)を扱い, その中心は紙, パルプであり, (株)新王子製紙日南工場の製品が出荷の多数を占めている。近年油津港は, 最大入港品を「化学工業品」, 最大出港品を「雑・軽工業品」に集約し, 増加させながら県南部の重要な流通機能を担っているのである。



第5図 油津港における出入港品目の推移

資料:「港湾課資料」より作成



第6図 堀川運河と油津港

港湾機能の歴史は、藩政時代まで遡り、造船の原料に飢肥杉弁甲材を積載した多数の大和型帆船（弁材船）が造船業の盛んな播磨地方と往来していた。1623（元和9）年より禄高引き上げを意図として植林された杉は、酒谷川、広渡川を利用して油津港に集荷された。当初広渡川河口が直接外洋に注いでいたため、同河川と油津港を結ぶ「堀川運河」（1686年、延長約900メートル、幅27メートル）が開削された<sup>5)</sup>（第6図）。戦前まで弁甲材を組んだ筏が、「ポンポン船」（小型船

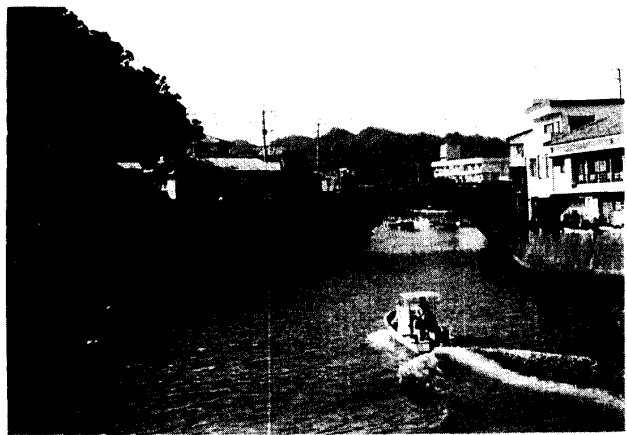


写真4 堀川運河とアーチ式の堀川橋

資料：1994年 筆者撮影

舶）に曳かれて同運河から油津港へと導かれた。しかし、戦後吾田地区の工業化、宅地化により1960年代に入ると水質汚濁が深刻化し、油津港整備計画（1975年）によって埋め立て事業が決定した。しかし飢肥の伝統的建造物群保存地区指定（1976年）に刺激され、アーチ式の石橋・堀川橋（1903年、長さ33メートル）を含む運河の保存が、1994年中央港湾審議会の歴史的港湾環境創造事業で決定し、観光資源として一躍脚光を浴びるようになった（写真4）。最近では映画のロケ地に選定されたり（1993年上映）、夏季の「港祭」期間中、夜間に同橋をライトアップして幻想的空間を演出するなど運河を生かした町づくりが積極的に推進されている。

## 5. 農村から業務・住宅地区へと発展した町ー吾田

吾田村は星倉村、隈谷村、西弁分村、戸高村、平野村が合併（1889年）して成立し、当時の人口は5,139人（1891年）であった。広渡川両岸および一里松周辺の土地利用は、稲作が中心であったが収穫期に毎年台風の被害を受けるため生産量は不安定であった。そこで県や市では1953年より早期水稻栽培を奨励した。さらに1960年代初期には水稻二期作が盛んになり、一時的に農家所得の向上に貢献したものの、二度目の田植え期に來襲する台風の被害や生産される米の質的低下の問題により衰退し、現在ではみられなくなった。広渡川左岸（東郷村）の白地で示されている地域は、かつて砂糖の原料にする甘藷畑であった（第2図・1902年）。これに隣接して東郷村に至る地域は、北郷町と並び県内有数の甘藷栽培地域であった。しかし外国産砂糖の流入が原因で昭和初期には星倉の飢肥製糸工場の養蚕に使用する桑畑へと変化した。その後、生糸価格の暴落により、戦後はみかん園になっている（第2図・1986年）。

吾田地区が大きく変容するのは、1937（昭和12）年に進出した日本パルプ工場の創業であった。広渡川の豊富な水量と藩政時代から当地で植林されていた杉を原料として製紙用パルプ生産が開始された。その後、幾多の変遷を経て1979年合併によって王子製紙日南工場（現・新王子製紙日南工場）となった。戦後は原料を杉から松や広葉樹に移行させてそのほとんどを県外、海外（中国、インドネシア、マレーシア）に依存している。現在では年産17万トン弱の上質紙（書籍・ノート用紙、画用紙等）、情報用紙（コンピュータ印刷用紙等）、加工紙（複写用紙）、特殊紙を生産する全国有

数の工場に成長した。日南駅東側の同工場周辺は工業専用地域、工業地域に指定され、この工業団地内には朝日鉄工、日南共同プラントをはじめ10数社の工場が立地している。

日南市発足（1950年）と同時に日南駅西側に市役所が設置され、その後国や県の出先機関が飫肥からの移転、新規立地により市役所周辺に集積し、中心業務地区を形成している。合同庁舎、日南警察署、日南消防本部等に加え、銀行、スーパー等の商業施設が国道222号線沿いに立地しており、同通りにはアーケードも架設された。また周辺の宅地の増加により、

人口も増加し、市街地が拡大している（第2図・1986年、写真5）。合併当時（1950年）の人口は、飫肥11,967人、油津12,901人、吾田10,894人であるのに対して、現在（1993年）は、飫肥7,442人（増加率 -37.8%）、油津7,134人（同 -55.3%）、吾田19,002人（同 74.4%）であり、吾田地区の急増は著しいものがある。広渡川と酒谷川に挟まれた地区は、かつて丘陵地および水田であったが現在では日南振徳商業高校に隣接して野球場、陸上競技場、体育館が完備した「日南総合運動公園」として整備され、市民のスポーツ振興の場として親しまれている。



写真5 宅地化が進展する吾田地区  
（遠景に新王子製紙日南工場を望む）

資料：1994年 筆者撮影

## 6. おわりに

日南市は、江戸時代より飫肥と油津の2つの歴史的核を有し、機能的に相互依存しながら発展してきた。その中間部である吾田は、2つの河川作用によって形成された平坦地を戦後、農地から行政・業務地区、工業地区さらに住宅地へと変化させて発展してきた。その結果、飫肥での著しい再開発は阻止され、城下町としての景観を大きく害することなく今日までその景観をとどめてきたのである。文化庁による重要伝統的建造物群保存地区の指定後は、景観保護にさらに拍車がかかり、貴重なたたずまいを守ることによって観光地として飛躍するきっかけにもなったといえよう。宮崎県の観光は、「新婚旅行の地」として1960年代に発展し、1970年代中頃まで続いた。その中心は南国的自然美の堪能にあったが、その後の著しい衰退により、近年まで同県の観光は、低迷を余儀なくされていた。このような状況下で、これまで宮崎県に大規模にみられなかった「南国の城下町観光」を飫肥が演出し、この方面での観光を飛躍的に発展させたことはたいへん意義が大きいのである。

油津は、漁業と流通の拠点としての機能を有してきたが特に入港品を化学工業品、出港品を軽・雑貨品に集約させて量的に増加する傾向を示している。これは交通整備により宮崎県南部から一部鹿児島県東部にまで後背圏が拡大したためである。また近年では飫肥地区での町並み保存の成功に感化され、堀川運河を保存する動きが活発化し、観光面での活性化が推進されている。



吾田は、行政と工業に代表される地域であると同時に都市の発展に欠かせない宅地供給の重要な機能を担ってきた。その結果、他地区での人口減を後目に人口急増地区として発展し、近隣には運動公園等のスポーツレクリエーション施設を配置するなど市民生活の中心地区として整備を図っている。

このようにして日南市は、市内での機能分担を明確にしながら互いに刺激し合って市街地形成がなされてきた。結果として市街地が、3つの連担する形態を形成するに至り、県南部の中核都市としての機能を果たすことはもちろん、今後いっそう魅力的な街として整備・発展していくことが期待されている。

## 注および参考文献

- 1) 伝統的町並み保護の動きは、1960年代後半に各地でみられ、各自治体で条例を制定し、独自の施策を講じていたが1972年にユネスコより文化遺産、自然遺産の国内的保護に関する勧告が出され、世界的な提起がなされた。これに呼応するように文化庁でも同年「集落町並み保存対策研究協議会」を発足させ、種々検討の結果市町村が主体となって国・都道府県がこれを後押しするという格子が確立した。このような動きの中で文化財保護法が改正（1975年）され、集落町並みに関する保存制度ができあがった。これを受けて各市町村が指定した伝統的建造物群の保存にふさわしい地区のうち文部大臣が、「わが国にとってその価値が特に高い」と認めるものを重要伝統的建造物群保存地区に選定し、1976年の第1回指定で飫肥のほか長野県南木曽町妻籠宿など7地区が保存地区に指定されている。
- 2) 同研究会は、1970年に本町通りを迂回するバイパス計画に危機感を募らせ、衰退すると予想される同通りを活性化させるための施策として結成されたいきさつを有している。街路の拡幅事業の推進に加え、1975年頃からは白、黒、茶を基調とする建築物の建設に統一して住民に協力を呼びかけた。電柱・電線の地中埋設化、標識の小型化、郵便局をはじめとする公共機関の建築物やバス停留所の標識の景観統一への協力等、住民の街に対する愛着と城下町を復元しようとする強い意志および事業の推進が城下町らしさを演出する積極的な街づくりを展開させている。
- 3) 「観光動向調査結果」（宮崎県観光振興課）による。この数値は宮崎県が県外観光客を対象としてマイカーを含む主要交通機関利用者にアンケート調査（観光予定先）を実施して得られた割合を各年次の県外観光客の入込み数にあてはめて算出したものである。したがって実際の入込み客数とは若干の相違が生じるものの、県外観光客の宮崎県観光の目的地を探る上ではたいへん興味深いものがある。青島・日南海岸は2,747,520人（1982年）から3,047,220人（1993年）へ1.11倍、都井岬は622,080人（1982年）から683,100人（1993年）へ1.10倍の若干の増加になっている。これらは数量的には多いものの、南国的自然美景観鑑賞を目的とする観光客数の増加率が鈍化していることを示しており、同期間に2.65倍もの増加率を示した飫肥の城下町観光への急増傾向は特筆されよう。
- 4) 小京都の条件として村井（1975）は、1. 京都との自然景観の類似性、2. 碁盤目状の町並み、武家屋敷、古い民家や寺町通り等による人為的景観の類似性、3. 習俗、産業等の歴史的伝統をあげている。わが国の近代化、工業化、都市化により時代が進展する中で「ふるさと日本再発見」の格好の的である各地の城下町は、近年ますますその存在価値が高く評価されている。飫肥をはじめ知覧、人吉、日田等九州から北海道の松前に至るまで全国各地には小京都の面影を残すまちが45にものぼる（『全国小京都の旅・1994』）。さらに全国京都会議の会員に加盟している全国の小京都は、41市町村に至っている（『小京都を訪ねる旅・1991』）。
- 5) 堀川運河は、五代藩主伊東祐実が中村与右衛門と田原権右衛門を堀川奉行に命じて事業に着手し、1686（貞享3）年に完成した。また同運河に架かるアーチ式の堀川橋（乙姫橋）は、1903（明治36）年飫肥の石工・石井文吉が、4年の歳月を費やして完成させた。

- 読売新聞西部本社（1993）：『歴史の町並み再発見』。葦書房，270ページ。  
太田博太郎・他（1982）：『図説 日本の町並み 12 南九州 沖縄編』。第一法規出版，181ページ。  
日南市産業活性化協議会（1993）：『油津 ー海と光と風とー』。鉦脈社，340ページ。  
山口恵一郎・佐藤恍・沢田清・清水靖大・中島義一編（1976）：『日本図誌大系』全12巻。朝倉書店  
竈瀬良明・堀淳一・山口恵一郎（1981）：『地図の風景』全20。そしえて  
村井康彦（1975）：『小京都へ』。平凡社，120ページ。  
横田 薫編（1994）：『全国小京都の旅』。弘済出版社，162ページ。  
全国京都会議監修（1991）：『小京都を訪ねる旅』。講談社，143ページ。

〔1995年12月10日受理〕

## Changing Land Usage Patterns in Nichinan City Urban Development

Shinobu ISURUGI

Nichinan-city, with 47,596 inhabitants (1995), is the core city in South Miyazaki prefecture. The purpose of this paper is to analyze the developement and present conditions concernig Land use changes in the center (Obi, Aburatsu, Agata) of Nichinan.

Obi is a castle town existing since the Edo period, in which the Otemon, Yokobaba and Jyumonji areas have been appointed important traditional buildings preservation districts. Each of these places has architectural and landscape beauty that leaves the visitor entranced. Obi was not included in the urban development of Nichinan, so the Samurai buildings were not destroyed. Tourists have a keen interest in visiting Obi.

Aburatsu has specialized in fishery and trade since olden times. The port of Aburatsu has exported Obi cedar since the Edo period, and fished Tunas and Bonitos since the Meiji period. Additionally it has become one of the most important ports in the southern region of Miyazaki prefecture. It brings in goods such oil and chemical products and ships out various paper products.

Agata is a new style town different from Obi and Aburatsu. After the pulp factory was built in Agata in 1937, it brought about industrialization in Nichinan. After World War II, Nichinan was born by combination of Obi, Aburatsu, Agata and other villages, and at the same time, the city hall was established in Agata. It has become the central business district. It has also been accompanied by a very rapid population growth in Agata, where most of the people in Nichinan live.